

お米からのメッセーシ

宮崎市立赤江東中学校 2年 吉田 遥香

お米ってすごいなと思う。だって、お米だけでもおいしいし、私の心をわしづかみにしているのだから。

私には、お米と聞いたなら必ず思い出すエピソードがある。あの出来事は今から何年前だろうか……。

ある日、母が私に「お米と炊いといて」と言った。母がお米を炊く姿をいつも見ていたので、「はい」と二つ返事で準備に取り掛かった。すると母が「無洗米だから洗わなくていいよ」と言ったのだ。「洗わなくていいお米なんてあるんだ！」と、とても感動した。

炊飯器のスイッチを押して数十分が経過した。「ピー。」とご飯ができた音がした。炊飯器を開けてみた。炊く前と全然変わっていない。不思議に思いながら、母に伝えた。すると、母が聞いてきた。「水、入れた？」

「入れるわけないじゃん。だって、無洗米なんだから。」すると、母が「無洗米というのはお米を洗わないでいいというだけで、炊くときには水は入れないといけないんだよ。」と教えてくれた。

私は間違ってしまったのだ。水を入れずにご飯を炊こうとした。私は、ご飯一つ炊くことができない自分に驚いた。ショックだった。それに、貴重なお米を無駄にしてしまった。何とかしたいと思い、失敗したお米に水を入れて、もう一回炊き直してみた。無理だった。母が、そのお米

をおかゆにしてくれたが、固くておいしくなかった。その日の夕食に母が作ってくれたおかずはおいしかったのに、ご飯はおいしくなかった。悲しかった。

炊き立てのお米は、香り、見た目、味、すべてからおいしさが伝わってくる。だから、「心」をわしづかみにされるのだ。ただ、他の国はどうだろうか？今でも戦争をしている国がある。食料に困っている国もある。だから私は、この平和な日常に感謝したい。きつと、私たちが何気なく食べている食事も、そんな国の人たちにとっては当たり前のことではないはずだ。

もし、世界が日本みたいに平和であれば、みんなおいしいご飯が食べられるようになる。そうなれば、私の心をわしづかみにしているおいしい「ご飯」で、世界中が笑顔で満ち溢れることだろう。

私は、ご飯を炊くのが上手になりたいと思った。あの失敗を犯した次の日からご飯を炊くようにした。水加減を母に教えてもらいながら、毎日炊いている。まだ、上手には炊けないけれど、母に褒められるようになってきた。少しずつだけど、上達している気がする。でも、もっともっとおいしく炊けるようになりたい。母のようにおいしいご飯が炊けるようになりたい。

あの時、母はすごく怒った。私は心の中で「ちゃんと教えてくれなかったから」「ただ間違えただけなのに」と思っていた。だけど今はその理由

がわかる。

きっと母は、「お米に申し訳ないことをしたんだよ」と怒っていたに違いない。お米に対して、そして、お米を作ってくださった人たちに対して、申し訳ないという思いで叱ったのだろう。さらに、食べるものが十分にない人たちのことまで考えたのではないだろうか。自分でご飯を炊くようになり、あの時、本当に申し訳ないことをしたと思えるようになって。そして、「食べる」ということが、どれほどありがたいことなのかということを考えることができるようになった。

私はあの時、お米を炊くことを失敗したことで、大事なことに気付かせてもらった。母に叱られたおかげで、大切なことを学ばせてもらった。私にとって、あの出来事はすごく勉強になった。そして、すごくいい思い出になった。私は、今日もご飯を炊く。お米が私に教えてくれたこと、お米から私が学んだことを大切にしながら。